

論文

スーザン・フロンバーグ・シェーファアの『アンヤ』と 『水牛の午後』—ホロコーストよりヴェトナムへ—

佐川 和茂

キーワード

機能する共同体
過去より紡ぎだす秩序
時間の流れを辿る内容
生者と死者の融合
遅咲きの人生
記憶の集積
持続と変容

目次

はじめに

- 1 ホロコーストよりヴェトナムへ
- 2 『アンヤ』の特質とは
- 3 『水牛の午後』の特質とは
- 4 ロバート・ノリスの選択
- 5 生存者の軌跡を辿って

結論

はじめに

「経営学の神様」と称せられるピーター・ドラッカーはオーストリアに生まれ、ヒトラーを逃れて英国より1937年に渡米している。そして、その2年後に早くも処女作『経済人の終焉』を出版しているが、苦難を経た後の迅速な達成には感銘を受けざるを得ない。この本の趣旨は、社会的、宗教的、経済的、政治的な制度を効率的に機能させ充足させることによって、ヒトラー体制のごとき全体主義の再来を防ごうとするものである。ドラッカーの経営思想の根底にはホロコーストの影が横たわっていることが窺えよう。これ以降、彼は30数冊の著作を発表してゆくが、その中で、企業経営のみならず、自己管理にも適用できる経営思想を普及させ、さらに知的思想と経営思想との融合を通して人文科学も活性化できる、と説く。晩年の『機能する社会』（2003年）においても、各人が身分や役割を持って全体主義の再発を防ごうとする機能する共同体や、効率的な政府を論じる点において、その思想を一貫させている。

1 ホロコーストよりヴェトナムへ

いっぽう、ホロコースト生存者の子供であるヘレン・エプスタインは、『ホロコーストの子供たち』の中で、「ホロコーストよりヴェトナムへ」至る道のりに言及している。それは、ドイツの難民キャンプで生を受け、後にヴェトナム戦争で戦った30歳のアルバート・シンガーマンに関するものである。彼の父はポーランドから強制収容所へ移送され、そこで最初の結婚でもうけた子供たちを失い、彼の母は自分の弟たちを殺されている。ホロコースト以後、無気力になった父と極端に神経質になった母は、悲惨な体験を絶えず語っては子供時代のシンガーマンを苦しめ、彼を怒りに満ちた凶暴な少年にした。そこで彼は、14歳で両親と別れて自活を始め、18歳で精神分析医を訪ね、19歳で軍隊に志願し、ヴェトナムへ行く。

著者エプスタインには、村落を焼き払い、多くの難民を作り出したヴェトナム戦争がホロコーストと二重写しになって見え、シンガーマンが「加害者側」につこうとしていたことが理解できないが、シンガーマンにとってヴェトナムは、彼の両親がホロコーストで経た生き地獄を追体験する意味を持っていたのである。

エプスタインを含めて「ホロコーストの知識を抱いて成長した若いユダヤ系アメリカ人たちは、自国がヴェトナムでヒトラーのごとく振舞っていることに愕然とする。彼らにとってホロコーストが新たな意味を帯び始め、彼らは戦争を生む社会体制を批判する行動に走るのである」（『アメリカのユダヤ人の歴史』805頁）。

こうして少数派ユダヤ系を中心として対抗文化が渦巻いた1960年代において、ユダヤ系青年トッド・ギトリンは、『60年代アメリカ——希望と怒りの日々』を著した。当時、ユダヤ系はホロコーストの影を引きずり、豊かさと破滅の狭間で生きながら、その世代の声となり、歴史を作ろうとしていた。彼らの国アメリカは一面で黒人に対して隷属を強制し、また、インディアンに対してジェノサイドを行っていた。さらに1965年から67年にかけてヴェトナム戦争が激化し、民主主義擁護の名のもとに行われる蛮行が、ナチスのガス室における冷酷な大量殺戮にも匹敵した。米軍は、第二次大戦全

体で投下した爆弾の4倍強をヴェトナムに落としていたのである。1971年以降には、陸海空軍兵士による反戦運動すら起こった。「ホロコーストよりヴェトナムへ」に至る流れの中で、少数民族の公民権、女性の権利、環境保護、反戦などを訴える動きが、まとまった運動のうねりとなってゆくのである。

そこで本論においては、こうした動きに沿って、ユダヤ系女性作家スーザン・フロンバーグ・シェーファーを取り上げる。彼女の2作品、すなわち第二次大戦中のゲットー、強制収容所、アメリカへの逃避行を跡付ける『アンヤ』と、イタリア系移民3世のヴェトナム戦争のトラウマ克服を描く『水牛の午後』に表現されるホロコーストよりヴェトナムへの軌跡を辿ってみたい。その際、良心的兵役拒否者ロバート・ノリスの創作を比較として絡めてゆく。

ところで、シェーファーがホロコーストやヴェトナムを作品化するに至った動機とは何であろうか。彼女自身にそのような体験があるのであろうか。いずれにせよ、シェーファーが巨大な歴史の渦、ホロコーストやヴェトナム戦争に巻き込まれた個人の体験を辿ってゆく点では、比較として取り上げるロバート・ノリスの場合も同様である。

ちなみに、スペインの作家ホルヘ・センプルンは、家畜用貨車によって収容所へと移送された『長い旅路』において、その執筆動機を以下のように語っている。「ソルドノに到着して以来、太陽を全身に浴びて本書を執筆することに打ち込んできた。過去より何らかの秩序を紡ぎだすことが、その目的であると認識していたのである」(126頁)と。ヴェトナム戦争の期間を良心的兵役拒否者として過ごしたロバート・ノリスと同様、センプルンは、過去の忌まわしい体験をある程度秩序立て、それより何らかの意味を引き出すために書くのである、と述べているが、その点、シェーファーの作品にも同様のことが言えるであろう。

ドロシー・バイリクも『生存者の移民』において、シェーファーの『アンヤ』を論じ、アイザック・バシェヴィス・シンガーと同様、過去を記憶し記録して失われた世界を保存しようとする彼女の創作態度を評価しているのである(101-03頁)。

2 『アンヤ』の特質とは

主人公アンヤによる一人称の語りによって、冒頭にホロコーストの回想が挿入されるが、それ以降はポーランドでのアンヤの生活、彼女の医師修行とハシド派男性との結婚、ゲットー、収容所、難民生活、アメリカへの移住という流れが綴られ、その中でのフラッシュバックや主人公による思索は乏しい。たとえば、それは、フラッシュバックを多用し、思索的な人間を登場させるソール・ベローとは対照的である。

シェーファーは、時間の流れを辿ってゆく大作を発表しているが、それは『ケイン号の叛乱』、『マージョリー・モーニングスター』、『ヤングブラッド・ホーク』などの著者ハーマン・ウォークを連想させるかもしれない。シェーファーやウォークは、読者に長編を飽きずに読ませ、多岐にわたる人生を追体験させるべくもろもろの技術を織り込んでゆくのである。大作であっても、登場人物のリストを作成し、時間の流れを辿って内容を要約してゆけば読みやすいが、(フラッシュバックや主人

公の思索に乏しい状態で)それが人生の現実を克明に照らし出しているかと問うならば、疑問が残るかもしれない。

まず、アンヤは、結婚に至るまで住んでいたポーランドのアパートに読者を導く。そこには8つの大部屋があり、子供は年齢順にエマニュエル、アンヤ、ヴェルシカ、ミスチャがいる。

12ヶ国語を話すアンヤの父は、夜間学校で学び、勤勉に弁護士を務め、田舎に別荘も所有している。音楽に秀でた妹ヴェルシカはピアノ演奏会を開き、アンヤは医学校の初年度を首席で通す。

アンヤに熱烈に求婚する男性は、ハシド派の技師である。二人は町一番のシナゴークで結婚式を挙げるが、一週間その祝いが繰り広げられ、ハシド派の祈りや踊りが続く。

アンヤは妊娠するが、無理をしたために流産し、再び妊娠しようやく娘ニンカを出産する。当時、両親のアパートには、ドイツのボグロムを逃れた人々が押し寄せ、戦争が勃発しようとしている。

夜間も空襲が続き、ワルシャワは火の海と化す。ドイツ軍が侵攻し、寂れたユダヤ人街にゲットーが建設され、父を含めた住民は鉄条網で囲まれた場所に集められ、殺されてゆく。わずかな料理道具やトイレを共有し、髪もつくろえない状態で乏しい食糧配給の列に並び、チフスやジフテリヤが流行する中で、アンヤはゲットーの病院で働く。ドイツの敗戦色がちらつくレニングラードの話題が出る頃、夫はゲシュタポに連行され、収容所で射殺されてしまう。次は子供が殺されるのではないかと怯え、アンヤは覚悟して娘を教会に預ける。

ゲットーの末期に住民は駆り集められ、隠れたり抵抗すれば射殺され、家畜用貨車にすし詰めになれ、収容所へと移送されてゆく。こうしてアンヤは優れた才能を持つ家族を失ってゆくが、これはたとえばエティ・ヒレスムの実話(『生きることの意味を求めて』)を連想させよう。

収容所では髪を刈り取られ、暖房のないバラックで不釣り合いの囚人服や虫の浮いたコーヒーや緑色のパンを与えられ、戸外で裸の身体検査を受ける。生命以外に失うものはない過酷な状況下で、アンヤは誰かのために生きる、という神秘の力を覚え、度重なる死線を潜り抜けてゆくのである。

司令官の下で働くアードマンは、実は偽造証明書を持つユダヤ人であるというが、彼の助けによってアンヤは変装し収容所を抜け出す。汽車に揺られて、娘ニンカを預かっている農家に着くが、そこにゲシュタポが搜索に来て、かくまわれていた人々と農夫を連行してしまう。

アンヤの人生に継続性が失われ、ぽっかりと穴が開き、そこには激変が絶え間ない。身分証明書を偽装し、病院で血液検査に従事していると、ゲシュタポに逮捕されるが、幸運にもワルシャワで知り合った将校にめぐり合い、牢獄より釈放される。しかし次には、たまたま乗った汽車がゲリラの地雷を踏み、半数の乗客が死亡し、アンヤも負傷する。

ロシア軍が侵攻し、ドイツ軍が敗走している戦局で、アンヤは自ら掘った穴に9日間も隠れ、足がはれ上がってしまうが、ようやくロシア兵に救助される。いっぽう、ニンカは孤児院に入れられ、彼女を預かっていた農夫は、ユダヤ人をかくまったかどで射殺されたという。そこで、アンヤは、ニンカを探して孤児院をめぐり、食べ物のない生活で変わり果てた娘に会う。言葉に尽くせない悲劇を経た娘と正常な関係に戻るには、長時間を要するであろう。

緊急病棟に職を得たアンヤは、レニングラードを体験したロシア人医師を助け、ニンカを探すのに協力してくれた14歳の孤児ヴラデクも病院で働く。

その後アンヤは、地雷が埋められ荒廃したワルシャワへ向かい、夫の家族を探す、遭遇したハシド派の人物に親族が全て殺されたことを聞く。

そこで27歳になったアンヤは、費用が工面できたら、アメリカかイスラエルへ行こうと考え、親族が最後を迎えた場所も不明なポーランドを離れてゆくのである。

船酔いに苦しむが、そこでアウシュヴィッツを生き延びたマックスに遭遇し、後に彼と結婚する。また、ナチ将校の妻たちが身分を偽って乗船しているが、これは、「1946年より52年末までに40万人以上の難民が米国に移住する過程で、ホロコーストの加害者、被害者の双方が定住の道を歩んでゆく」(『アメリカとホロコースト生存者』254頁)ひとつの例である。アメリカではユダヤ人組織ジョイントが新生活の援助をしてくれるというが、アンヤは医学校を終了し、仕事を探すつもりである。

紆余曲折を潜り抜けた戦後、52歳になったアンヤは過去を振り返り、亡き母と想像の対話をするが増えてゆく。看護勤務をしていた思い出が耐え難く、医学校を終える夢も断念し、繁盛している夫マックスの古物商を手伝う。

そうした状況でホロコースト生存者に特有のトラウマがアンヤにも顕著である。常に先へ先へと物事を急ぎ、ヒステリックな狂気に陥ることも多い。空になった皿を見ることは恐怖であり、美しく成長し結婚した娘やその子供たちのことを常に異常なほど気にかけている。悪夢より解放されず、恐るべき記憶を抱えて余生を送らねばならない。収容所で頭を打たれた後遺症で頭痛にも苦しめられている。また、マックスと結婚して救われてはいるものの、親族が跡形もなく消されてしまい、大きな孤独を感じている。

回想するアンヤはしばしば瞑想する。運命か、それとも神秘の力か、何者かが自分をこれまで生かしてくれたのであると。また、人生はあらゆるものの混交であると。彼女は戦争の苦難を通して学んだことを決して忘れないであろう。危険には慣れており、その中で生き抜く技を体得しているのである。近所にはゲッターや収容所を生き延びた人々が暮らす、ホロコーストを潜ったもの同士は、理解しあえ、信頼できると思う。アンヤは、ドイツ政府より賠償金をもらいながら、過去の混沌より何らかの秩序を求めるべく、自らの気持ちを紙にしたためてゆくのである。

こうしてアンヤは、青春時代を巨大な暴力によって損なわれたが、いっぽう、友人レイチェルや孤児ヴラデクは、戦後は医師となって活躍している。苦難を越えたその達成には、一条の光を見ることができよう。

『アンヤ』は女性の視点によって大きな悲劇を詳述した大作であるが、これをホロコーストを描くいくつかの作品と比較してみたい。

まず、メンデル・バイリス事件という過去の小宇宙にホロコーストを示唆して1960年代アメリカをも見据えようとするバーナード・マラマッドの『修理屋』、被害者と加害者の両面から大惨事を見つめるジェラルド・グリーンの『ホロコースト』、少年の眼を通したエリ・ヴィーゼルの『夜』、ホロコースト生存者と黒人青年の交わりを軸としたエドワード・ルイス・ウォーラントの『質屋』、ホロ

コースト前夜にポーランドより渡米したユダヤ家族3世代を辿るイスラエル・ジョシュア・シンガーの『カノフスキー家』、ホロコースト前後を比較して生存者の狂態を綴るアイザック・バシェヴィス・シンガーの『愛の迷路』、そして、ユダヤ老賢人を主人公にして数日の出来事を描きながら、フラッシュバックによってホロコーストや六日戦争を挿入してゆくソール・ベローの『サムラー氏の惑星』。これらの作品は、それぞれホロコーストを印象深く読者の胸に焼き付けるが、シェーファーのように、冒頭に回想を置き、時間の流れに沿ってホロコーストを辿ることも記憶に残るアプローチであろう。

3 『水牛の午後』の特質とは

シェーファーは、『水牛の午後』では、大きなキャンパスにヴェトナム戦争の悲惨な状況を埋め込んでゆく。そこには神秘的な傾向も挿入され、最終場面では生者と死者の融合が見られる。イタリア系移民3世代の奮闘、ピートのヴェトナム参戦とそのトラウマ、紆余曲折の果てにピートが立ち直ること、がこの作品の特質と言えようか。

ブルックリンで生まれたシェーファーは、この時点までに7冊の小説、一冊の短編集と5冊の詩集を出版し、博士号を取得してブルックリン・カレッジで教えている。

さて、祖父ピエトロは、新たな生活を求めて子供時代にイタリアより単身ブルックリンに渡り、艱難辛苦の果てに大工や配管工になり、夜学で英語を学び、3年目に家族を呼び寄せている。その後結婚して、子供もでき、地下室を持つ三世代住宅を建てるなど、移民として成功している。その息子ジョージが結婚し、子供の一人が祖父の名前をもらい、ピートとなるのである。

祖父ピエトロは勤勉に働き熱心に読書に励んだが、父の世代は教育を軽んじ、孫の代にいたって再び読書に関心が向く。争いが絶えない移民家庭の中で、周囲の期待はピートに集まってゆくのである。

幸福になるだろうという祖母の信念を信じてピートは成長するが、不幸なことに、彼は悪事を働いて少年院に送られ、いっぽう、障害を持って生まれた弟ポールはスタテン島の擁護施設に預けられる。

そこでピートは、17歳で家族と別れ、軍隊に志願し、ヴェトナムで人生をやり直したいと思う。その思いは単純であり、そこには、ロバート・ノリスを悩ませる戦争の是非を問う思考は窺えない。一年間に限られたヴェトナム滞在であるが、戦地では生死の境が曖昧になり、恐怖で迷信に駆られる人々に混じって、それまでなじんでいた世界は消えてしまう。所属部隊では、それぞれが特技を持つ、インディアン出身のチーフ、黒人デイヴィス、ユダヤ系リボヴィッツなどと出会い、彼らと戦場を駆け巡る。

しかし、ヴェトナムの初日で早くもピートは多くを目撃することになる。兵士たちの残飯をあさる現地の人々、犬猫や子供や椰子の実にまで仕掛けてある爆弾、少しでも怪しまれると撃たれる恐怖。そこで自然死を迎えられる人は皆無であり、母の慰め言葉「明日があるわ」は、恐怖しかもたらさない。

戦場では、その恐怖が人を行動へと駆り立てるのである。やがてピートたちは、殺された人の頭を平気でボールに代用しサッカーに興じる。いっぽう、敵をナパーム弾で数時間にわたって攻撃すれば、周辺の生物がすべて死に絶えてしまう。また、爆撃付近にいた子供がかごを持って近寄ってくるのを怪しみ、その頭を撃ってしまう。

斥候に出かける密林では時間感覚が薄れがちである。蚊を避けないと、マラリヤに冒され、鰐や毒蛇にも気をつけねばならない。夜は周囲に地雷を仕掛け、穴を掘って眠るが、蛭はどこにでもいる。また、暑さの中で蚊に悩まされ、鋭い竹笹に身を切られながら、暗い密林を長時間歩くのである。

兵士たちはペットを飼ったりして、基地での決まりきった仕事に変化を求める。また、彼らは、勇敢な行為で勲章を得て家族に誇れることを望むが、悪夢のような戦争で神出鬼没のヴェトコンに悩まされ、猿や蜂や蟻にも苦しめられている。

突如、大勢の敵が地雷線を突破し、基地に侵入してくる。朝になってまさに崩壊に瀕していたことを悟るのである。死体に蝇や鼠が群がり、ひどい悪臭が漂う。ばらばらになった大量の死体をブルドーザーで片付けても、その悪臭は消えない。ピートは、ヴェトナム民衆が米軍に友好的であるとは思えず、いっぽう、軍隊が兵士を実験台にして武器の性能を試し、ゲリラ戦を続行させていると疑い、将校に対しても批判的である。

ところで、この作品では、大量殺人に混じって動物の犠牲が、ある意味では人の死よりも鋭く、読者の胸に焼き付けられてゆく。たとえば、ヴェトナムの村落を焼き払った折、兵士たちが豚を生きたまま火中に投下するが、その悲痛な叫びがピートの耳からなかなか消えない。また、戯れに兵士たちは猿を縛ったまま放置するが、爆撃後にそこには肉塊と血痕しか残らない。さらに、ナパーム弾の波状攻撃によって周辺の生物は、蚊や蟻や蛇を含めて最後の一匹まで死に絶えてしまう。人だけが特別の存在でありえようか？ とピートは問うのである。ちなみに、ヴェトナム戦争の時代に環境保護を訴えたレイチェル・カーソンの『沈黙の春』において、最も心に残る場面のひとつは、農業空中散布後の雨で生じた水溜りで、無心に水浴びをする小鳥たちの姿（94頁）である。

ピートは、一年後にヴェトナムより生還しても、蝇を殺すことができず、蛙のために車のブレーキを踏み、また、密林にはなお多くの地雷が埋められ、動物がその犠牲となっていることに心を痛めている。

もし戦争がなかったならば、ヴェトナムは観光に適した国であろう。バナナや椰子の実がたわわに実り、空の下に広がる美田には稲が育ち、水には魚が豊富である。鳥は、水牛の背中に止まって虫をついばむ。ヴェトナムの少女リーは、昆虫や蟹を味わっていた村落の生活を懐かしむが、彼女が12歳のとき戦争が勃発するのである。水牛が仕事から解放される水牛の午後に、家路を辿っていた彼女の目前で、かわいがっていた水牛が白人兵に殺されてしまう。水牛は倒れる寸前に彼女をじっと見つめ、リーは水牛が自分の身代わりになってくれたのだと思う。ここで乙女の人生は幕を閉ざされ、かつて感じていた世間に対する信頼は薄れてゆく。

その後リーは、平和だった村を出て売春宿でピートに出会うのである。彼女は、部隊が出兵しても、ピートを捜し求めるという。英語を話せ、密林を知り、村落の慣習に詳しいリーは、髪を切り、

軍服を着け、敵で埋まった村落を偵察するのである。彼女は、ピートとともに荒廃した国内を巡り、水牛の復讐をし、秩序を回復したいと願う。やがて密林で彼女に女子が生まれるが、それをヴェトナム兵が地面にたたきつけて殺し、ピートはその兵士の首を折って復讐をする。アメリカ人とヴェトナム人の間でリーの運命が揺れ動く。

そのうちにリーやチーフが基地より消えてしまい、やがて幻影を見る兵士が出てくる。白い布を着た人影が出没し、基地に共同幻想がはびこるのである。あるとき、密林で負傷した兵士たちを、白い人とリーがじっと見つめている。

さて、生還したピートは、ロバート・ノリス同様、アメリカに所属感を得ることができない。ヴェトナム体験を語り合う相手も見つからず、仕事を探すこともなく、無為に時を過ごしている。生存者は、ホロコーストにせよヴェトナムにせよ、極限状況における体験を聞き理解してくれる人を探すことが困難である。悪夢にうなされ、汗にまみれて起き上がることが多い。父に「お前は戦争に負けたんだ」と言われて以来、父と言葉も交わさない。

やがて高校中退であるピートは夜間学校に通うが、「世界の警察」であるアメリカが引き起こした、ナチスの蛮行にも匹敵するヴェトナムでの集団虐殺に嫌気がさして退学し、長距離運送トラックを運転し、合間に記録を書く。

そのうちに以前なじみであった女性ドロレスと結婚し、二人は小さな新居に落ち着くが、戦争を経たピートと、戦争はメロドラマを中断したものに過ぎなかったドロレスとは、生活に対する考えが違う。婦女子を大量殺戮した狂気のヴェトナム帰還兵と結婚したと言われて、彼女の内面に不安が高まってゆく。いっぽう、ヴェトナムから米軍の撤退が続き、国内の反戦運動が激化し、多くの帰還兵が戦争犯罪を告発している。ピートは、自らもぬぐいがたい罪意識を持つと告白するが、それを笑った妻を、あわや絞め殺そうとして、異常者の病棟に隔離される。

そうこうする間に、養護施設にいる弟は亡くなり、半年後に母も癌で失意の中にこの世を去ってゆく。ドロレスは別の男性と暮らしており、セント・ルイスに引っ越すという。ピートは、ブルックリンが目に見えない鉄条網で囲まれた強制収容所のように思えるのである。

時間が速やかに過ぎ去り、ピートのしわも増えてゆく。妻と離婚し、弟や母をなくし、途方にくれているピートは、医師になって妻アリソンと暮らす戦友サルに勧められ、日系の精神療法家シット医師より週4回の治療を受けることになる。医師は、広島原爆投下後に残された人の影を物語る。

帰還兵の集会では手柄話が繰り返され、ヴェトナムの教訓が活かされず、さらなる紛争がやむことがない。ピートは疲れ、入院し、そこでマドレーンという看護婦と知り合いになり、退院後に彼女を食事に誘う。グアム島の空軍で看護婦として働き、夜間大学に通ったというマドレーンに過去を打ち明けると、彼女はそれを理解してくれる。38歳になったピートは、清潔好きであり、同様に読書好きであるマドレーンと結婚する。

やがてかつての部隊メンバーが再会するクリスマス・ダンスが企画され、関係者が方々より集ってくる。ピートは、ヴェトナム戦争を経て20年を生き延びたわけである。会場には、輪廻の部屋、再生の部屋などが設置され、生者と死者とが融合したようなダンスが展開されるのである。その中

で、白い人は包帯を燃やし、訪れたリーと融合する。後で参加したシット医師は、サンフランシスコの収容所にいたという。

過去は火山のごとく激しく、その影は長い。意味が不明であった出来事が、後によみがえってくる場合がある。たとえば、ヴェトナムで埋葬された娘が、我が子が同年齢になったときに思い出されて、胸を締め付ける。

ピートは、戦争を経た危険人物であるかも知れないが、幽閉されるわけにはゆかない。いわば地雷原に立ち続け、それが爆発しないよう祈るような生活である。たとえ回復に時間がかかろうとも、自分を信頼してゆくしかない。紆余曲折の人生をそれなりに愛し、水牛の午後のようにゆったりと歩み、収穫を持ち帰るときがいつかは訪れるであろう。年齢的には遅いが、人生の内容はそれほど貧弱でもない。建設関係に携わるピートや医師になった戦友サルは、今後の人生へ望みをつないでゆく。

悲劇を体験したものは覚えていたくない、語りたくない、後から来たものは知りたくない。これでは歴史より何を学べようか。戦争を体験したものがそれを伝えなければ、再び愚かなことが繰り返される。

4 ロバート・ノリスの選択

ピートは人生をやり直すべく参戦したが、ロバート・ノリスの場合は、良心的兵役拒否者の道を選ぶのである。

彼らの世代は、なんら保障を与えてくれない世界において、人生の初期に重要な決定をしなければならない。ノリスの場合、それは不正であると信じるヴェトナム戦争への徴兵を拒み、良心的兵役拒否者となって、監獄へ入ることであった。軍の法廷で裁かれた折に、彼は言葉の重要性を認識し、将来は作家になろうと決意するのである。そこで、ヘンリー・ミラーやマルカム・カウリーに惹かれ、働きながら遮二無二作家修行に励む。軍では「不適格者」と烙印を押され、社会では「臆病者」と呼ばれる苦難をしのび、もはやアメリカに所属していないと痛感する。そこで、混乱した自己を鍛えなおし、アイデンティティや生きる場所や将来の職業を求めてヨーロッパを、インドを、イスラム圏を放浪し、最終的に日本にたどり着くのである。彼は、創作を通して自らが落ち込んだ混沌や狂気より何か有意義なものを見出し、それを世の中に還元したいと願う。

彼が放浪の過程で経る悲惨なインド体験は、両親のホロコースト追体験を求めてヴェトナムに向かったシンガーマンの行為を連想させる。それは、彼にとっていわばヴェトナム参戦の代わりをなす体験であったといえよう。自分に押し付けられた「不適格者」や「臆病者」の烙印を払拭する意味で、汚濁や混沌やハンセン病患者にまみれた彼のインド体験がある。

良心的徴兵拒否者の牢獄・放浪体験を伝える『夏を求めて』や『遥かなる日本への旅立ち』の最後では、奮闘の結果、これだけは達成できたという高揚感に到達している。

3作目『囚われ』の主人公ハーランには、ヴェトナム戦争の影や、インドで目撃した悲惨な状況のトラウマが付きまとう。彼は冷たい外貌を崩さず、愛という言葉を信用できない。酒に浸り、部屋は散らかし放題である。

それでも彼は執筆活動を通して、過去の悪霊を払いのけ、過去の体験を何らかの価値あるものに還元したい、という願望を捨てていない。

いっぽう、彼と交わる良子は、主人公の女性版のようである。娘時代に肉親によって身体を汚されたという悪夢に縛られ、多くの男性遍歴を重ね、自殺未遂を繰り返し、アルコールにも依存している。

しかし、彼女もカナダ留学中に大怪我をした結果、人生の些事にさえ感謝する気持ちを取り戻し、やがて結婚し、息子の成長に喜びを抱く大人へと変貌してゆくのである。

4作目『夏に迫る秋の影』が示唆するように、ノリスにとって遅咲きの人生は避けがたいものであるが、自己探求の旅で知り合った人々より生きてゆく方向性を探り、病気や不運が伴う人生を経て、最後には居心地のよい場所に到達できるであろうという望みを捨てていない。

5 生存者の軌跡を辿って

アンヤ、ピート、ノリスは、極限状況を潜り抜けた生存者たちである。彼らにとって、他者のために生きる気持ち、職業を求める気持ち、体験を伝えようとする気持ちが、彼らに存続を促す要因であろう。彼らは記憶し記録することによって体験を集約しており、そうした記憶の集積が、歴史の過程で同胞に影響を及ぼしてゆく。

彼らの教育に関しては、アンヤの医師修行やピートの夜間学校があり、高卒であったノリスは通信教育で修士号を獲得し、日本の大学で教えながら創作を継続している。ところで、アンヤやピートの場合、脇役の人物が医師になっていることは興味深い。

振り返れば、筆者（佐川）は20代初期より11年7ヶ月にわたって在日米軍基地に勤務した折、ヴェトナムで負傷した兵士が基地内の病院に運ばれており、特に黒人兵士を多く目撃した。「どうして日本はこんなに平和なのか？」と彼らはよく尋ねたものである。ヴェトナムで片足を失ったクラツァー軍曹、勤勉な黒人のローレット大尉、日系のタナカ大尉、ベロー編『ユダヤ珠玉短編集』を贈ってくれたユダヤ教の従軍ラビや、メイラーの研究書を出したバフィジス氏や勤勉なモルモン教徒ニーボー氏などとの交わりが懐かしい。彼らがホロコーストよりヴェトナムへの影を筆者に意識させ、彼らの言葉が『水牛の午後』の言葉と響き合い、その後、筆者が味わう文学作品にしばしば彼らの姿が見え隠れしていることを確認しておきたい。

結論

今日ホロコーストを取り上げるのであれば、いかなる工夫が可能であろうか。ホロコーストを描く持続的な努力に加えて、それに伴う変容を論じなければ、現代の読者の関心を引くことはできないであろう。その変容として、ホロコースト以降をヴェトナム戦争、六日戦争、広島、長崎、日系の収容所体験、イスラエル・中東問題などと絡めて描くことが、ひとつのアプローチとなりうる。

シェーファーの場合は、ホロコーストよりヴェトナムへの軌跡を辿ろうと試みたひとつの例である。『水牛の午後』には、ヴェトナムやホロコーストに加えて、広島や長崎の原爆、日系アメリカ人

収容所も言及されている。

ホロコーストやヴェトナム戦争以降も紛争が繰り返され、難民が続出しているが、その現実に対抗する意味で、持続として生存者の記憶を積み上げ、それに変容を加えてゆく。持続と変容の長い歴史の中で、徐々にではあるが改善へと向かってゆくものがあることを期待したい。

「ユダヤ人は、ユダヤ教を含めた精神修養によって存続してきたのである。それでは、ホロコースト研究によって得られるものは、果たして永続的な内容であろうか。また、ホロコースト研究によって何らかの光が見えるであろうか」(『アメリカのユダヤ人の歴史』 847頁)。こうした問いに答える意味で、ホロコースト研究における持続と変容を模索してゆきたい。

そして、心ある各人が、ホロコーストやヴェトナムの悲惨な歴史を振り返りつつ、冒頭で述べたドラッカーの機能する社会を求めながら、小さな勝利を積み上げてゆくことが望まれる。

参考文献

- ギトリン、トッド. 疋田三良、向井俊二訳. 『60年代アメリカ——希望と怒りの日々』. 彩流社、1993.
- ヒレスム、エティ. 大社淑子訳. 『生きることの意味を求めて』. 晶文社、1989.
- 日本マラマッド協会編. 『アメリカの対抗文化』. 大阪教育図書、1995.
- 佐川和茂. 『ホロコーストの影を生きて——ユダヤ系文学の表象と継承』. 三交社、2009.
- Bilik, Dorothy. *Immigrant-Survivors: Post-Holocaust Consciousness in Recent Jewish American Fiction*. Connecticut: Wesleyan UP, 1981.
- Carson, Rachel. *Silent Spring*. Middlesex: Penguin Books, 1962.
- Dinnerstein, Leonard. *America and the Survivors of the Holocaust*. New York: Columbia UP, 1982.
- Drucker, Peter F. *The End of the Economic Man*. New Brunswick: Transaction Publishers, 1939.
- . *Adventures of a Bystander*. New Brunswick: Transaction Publishers, 1994.
- . *The Essential Drucker*. New York: HarperCollins Publishers, 2001.
- . *The Daily Drucker*. New York: HarperCollins Publishers, 2004.
- . *A Functioning Society*. New Brunswick: Transaction Publishers, 2003.
- . *Management: Tasks, Responsibilities, Practices*. New York: HarperCollins Publishers, 2008.
- Flaherty John. E. *Peter Drucker: Shaping the Managerial Mind*. San Francisco: Jossey-Bass, 1999.
- Norris, Robert. *Looking for the Summer*. Touka Shobo, 1996.
- . *The Many Roads to Japan*. Osaka Kyoiku Tosho, 1997.
- . *Toraware*. Touka Shobo, 1998.
- . *Autumn Shadows in August*. Morrisville: Lulu Press, 2006.
- Rosenstein, Bruce. *Living in More Than One World*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers, Inc., 2009.
- Sachar, Howard M. *A History of the Jews in America*. New York: Alfred A. Knopf, 1992.
- Schaeffer, Susan Fromberg. *Anya*. New York: Avon Books, 1974.
- . *Buffalo Afternoon*. New York: Alfred A. Knopf, 1989.
- Semprun, Jorge. *The Long Voyage*. Middlesex: Penguin Books, 1964.
- Wouk, Herman. *Marjorie Morningstar*. New York: Little, Brown & Company, 1955.
- . *Youngblood Hawk*. New York: Doubleday & Company, Inc, 1962.